

校長のつぶやき II

校長室便り 第22号

令和2年7月27日 山内

○新型コロナのカタカナ語 –パンデミック ソーシャルディスタンス クラスタールックダウン–

今回のコロナの影響で新たに登場したカタカナ語は少なくありません。まずは「ウイルス」と「ワクチン」ですが、ウイルスは非細胞性で基本的にはタンパク質と核酸からなる粒子です。ワクチンは接種することで、わたしたちの体内にウイルス等病原体に対する免疫を作り出します。定義は皆さん生物等で習って知っているかと思いますが、問題は発音です。ウイルスは「ヴァイアラス」ワクチンは「ヴァクチン」と英語では発音されます。ウイルスやワクチンという発音はドイツ語やイタリア語に近いです。

パンデミックはどうでしょう。発音はほぼこれでいいのですが、意味はどうですか。「同じ感染症が短期間に世界的に発生すること」を言います。クラスタールックダウンの発音はほぼ同じ。LとRの違いなどは気にしないで良いです。仮にRで発音してもコロナ禍では全世界で通じます。意味は「感染症拡大防止などのために、大都会において、人々の外出や移動を制限すること」となります。

最も耳にする新語のソーシャルディスタンス（フィジカルディスタンス）も発音はほぼ大丈夫です。意味は人から人へうつる感染症の拡大を防ぐために、人同士の距離を大きくとり、密集度を下げることです。ソーシャルディスタンスはいかにも新語で「新しい生活様式」のようですが、ある意味数十年前の日本では当たり前な生活様式だったとも言えます。例えばあいさつは握手や肩を抱きかかえて大げさに行うのではなく、間隔を空けて相手に丁寧に頭を下げます。茶碗や箸なども個人の物が決まっていました。盆踊りは距離をとり、相手には触れず、フォークダンスで相手と触れあうことには抵抗を感じていました。子供やお年寄り等介助を必要とする場合以外は他者に直接接触することなど御法度でした。50年以上前の大阪万国博覧会ででしょうか、東京オリンピックででしょうか、「世界の国の人々と握手をしよう」とこれまでの伝統文化は軽視され、欧米化が進んでいったと思われまます。人との距離をとることは50年以上前と今では結果は同じですが、両者の出発点は全く違います。間隔を保つことを重視することは相手を尊重し、敬愛する「日本人の心」でした。ところが今は近くに感染者がいるかもしれないという日本人には合わない「猜疑心」や「恐怖心」があるのです。

コロナ禍において感染予防から他人との距離をとることは必要ですが、同時に忘れかけていた我々日本人の持つ「相手への敬意」を払うこともコロナに打ち克つ大事なことなのです。

○保護者面談 –ご来校ありがとうございます–

保護者面談週間も今週が最後です。上履きをご持参いただくなど、ご不便をおかけしてはいますが、お忙しいところわざわざご来校いただきありがとうございます。ご相談・ご質問等遠慮なくお申し出下さい。

○梅雨明けは –鳴き始めたセミ–

自分の名前のせいか、なぜだか蝉には親しみを覚えます。小学校の夏休み課題研究には蝉の生態について3、4年行ったくらいです。城山の鳴き声もウグイスやホトトギスから蝉の声にかわってきました。梅雨明けはまだ発表されていませんが、来週からは夏休みです。ではこれで今回はお終いです。